

原点

津守 真

毎日、大人の肩の上に乗っている子どもがいた。あるとき、私は、その子を肩に乗せて歩きながら、この子を本当にあるがままにお前は認めているのかと自問自答した。そして、君は口をきかなくとも、肩の上に乗っているだけでも、いまのまままで立派に一人前なんだよと言った。そうするとその子は私の肩からおり、私の机の前の回転椅子に座って、椅子をひと回り回転させるたびに私の顔を見て、にこっと笑った。私は子どもとの距離が縮まり、急に親しくなったような気がした。一緒にいる大人が心に思っていることは、それを言葉に出すかどうかを問わず、直接に子どもに伝わっていることを私は実感した。

一日の大部分を大人に抱かれて階段を上り下りしたり、歩き回ることを欲する子どもがいた。その子は四歳なのにとっても重たく感じられた。私はその子を抱きながら、こうして次第に体重が重くなったら、その子の足は体を支えられなくなり、ますます歩行が困難になるのではないかと心配した。そう考えると、できるだけ歩かせようと試みることになる。その子はそれを嫌がって、抱かれて歩くことを強く要求した。あるとき、私は、この子は移動したいときにはいざったり、大人に助けを求めめるのだから、一生歩けなくてもかまわないではないかと考えた。そのときから気持ちも軽くなり、抱いたときの重量感も減少した。私だけでなく、何人もその頃同じようなことを経験していた。ある日、その子は廊下をたったひとり歩いて歩いていた。その足は体重を立派に支えていた。以来、その子は殆ど自分の足で歩いて移動している。私は母親に私共の気持ちの変化を話すと、母親はすぐに同意して、極端なようだけど、一生歩けなくともいいと覚悟がきまると、何もかもが変化するようですと言った。この十年間に、沢山の親たちが私に同様のことを語ってくれた。そして沢山の子どもたちが、あれこれの能力の増加だけでなく、人間的なふくらみをもって成長している姿を見せてくれている。

子どもに、少しでも上の段階のことができると期待するのは、親の自然の情と言う人もある。けれども、ひとりひとり違う子どものあるがままを認めて、日々を一緒にたのしんで過ごそうと考えはじめると、大人は自分の規準に固執することをやめ、自分自身

を変化させることが可能になる。親になること、保育者になるということは、子どもをあるがままに認めるといふ、子どもとの関係の原点に日々立ちもどることである。原点は、日々新たに子どもにもふれることによって、日々発見し直される。すなわち、保育者も子どもも日々成長する。

(愛育養護学校)

